2020年度「自由を生き抜く実践知大賞」ノミネート一覧 実践事例概要

NO	実践主体	実践事例名称	コロロビューCJA、スペルスパイン・QJン マード・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1	人間環境学部 小島ゼミナール(コジLABO)	「いいやま学びの里サマーカレッジ」~輪を紡ぎ、未来へつなげる~ 持続可能な地域社会への15年の軌跡と継承、	地域の文化や人物、魅力を他地域や次世代へと広めていく「オーラルヒストリ―」「イノベーターズファイル」等の活動や、住民自らが地域について考察する「地域づくりフォーラム」の開催によって、 持続可能な地域社会の発展に寄与している。
2	図書館事務部	1. 家で使える図書館サービス 2. 文献複写(雑誌・紀要等)郵送サービス 3. オンライン・レファレンスサービス 4. 図書の郵送貸出 5. 基礎ガイダンス・オンラインコンテンツ 6. 図書館による文献情報検索講習「法令・判例・文献の利用方法を覚えるために」 7. 企業・業界情報調ベ方オンライン・セミナー 8. つながる「読書会」	「緊急事態宣言」発出により図書館が4月9日より閉館し、一時期は館内サービスができないだけでなく蔵書の貸出も行えない状態となった。非来館型のサービス=オンラインによるデータペースの利用や電子ブック、電子ジャーナルの利用は継続していたが、新入生へのガイダンスも行えず、2年生以上にもサービス内容の周知が不足している状況であった。来館を伴わないサービスがあることを周知することはもちろん、十分に利用してもらうために考えた施策が図書館ホームページの特設記事で家で使える図書館サービス」である(5/15掲載)。この記事にはデータペースや電子ブックなど図書館のオンラインサービスの利用法をコンテンツとしてまとめている。さらに新入生、2年生以上に分けることで学年ごとのニーズに対応させた。また自宅から利用する際のVPN 接続方法などと図書館のオンラインサービスの利用法をコンテンツとしてまとめている。さらに新入生、2年生以上に分けることで学年ごとのニーズに対応させた。また自宅から利用する際のVPN 接続方法などと図書館のオンジインサービスの表した。また自宅から利用する際のVPN 接続方法なども図書館のオリジナル解説ページを作るなど、ワンストップでの案内を目指した。 7月以降、閉館が当初の想定以上長引いたため、新たなサービスも追加した。雑誌・紀要等の文献単位での複写送付サービス、オンラインでのレファレンスサービス(5/14 開始)、郵送による図書貸出(5/26 開始)である。これらは開館後の今でも、求めに応して継続しており、実績を上げている。その後6/12 より制限付きではあるが開館を再開した。しかし来館者は決して多くはない。来る全面再開を目指し図書館の機能をフルに使ってもらえるよう、オンラインでの利用者ガイダンスに注力することとした。そのひとつ、「基礎ガイダンス・オンラインコンテンツ」では、利用者にガイダンス動画自体に興味を持たせ、図書館利用の期待感を高めてもらえる。今までにない仕掛けを動画の中に含めた、「予ちくためになり、全体の理解に繋がった。」、「初めて報る人でも理解が深まるだろうを感じた。「多の歌題も届いている。秋学期開始期には、具体的事例に沿った情報、文献の検索やデータベース利用の講習として「図書館による文献情報検索講習 ※65の収3・26・判例・文献の利用方法を覚えるために~」を開催(9/16 9/26)、「数数生を含む100名を超える予想以よの参加者を得た。第で発して「図書館による文献情報検索講習 ※65の収3・26・判例・文献の利用方法を覚えるために~」を開催(9/16 の)と20、110/21 に対してのをがりとを対したが表の利用方法を覚えるために~」を開催(9/16 の)と20、110/21 に対しいのをを超える予想以よりの加者を得た。第で発して「図書館として「図書館による文献情報検索講習 ※65の収3・26・判例・文献の利用方法を覚えるために~1.5 年間(10/12) に対談計170名以よの参加を作ることを補完するだけでなく、大学に来られずコミューティに参加できないでも受けまがませまがままり、110/21 に対しまり、110/22 できないかを検討、企画した。その結果が以下の取り組みである。オンライン上でのま一ティング「つながる洗書を当てに付いるに対しませまり。110/22 では、図書館といただきまりの参加を持ていまり、110/22 できないかを検討、700/22 できないかを検討、700/22 できないかを検討、700/22 できないがを検討、700/22 できないかを検討、700/22 に関するが、100/22 に対しため、100/22 に対しませなが、100/22 に対しませないが、100/22 に対している。100/22 にはないできないかを検討、700/22 に対しているができないかを検討、700/22 に表しませたり、100/22 に対しまりましまりませないが、100/22 に対しませないためによるときないないまるでは、700/22 に対しませないでは、700/22 に対しませないませないないませないませないませないませないとないませないないます。100/22 に対しませないでは、100/22 に対しませないでは、100/22 に対しませないでは、100/22 に対しませないでは、100/22 に対しませないがでは、100/22 に対しませないでは、100/22 に対しませないがでは、100/22 に対しまればないには、100/22 に対しませないないがでは、100/22 に対しないませないでは、100/22 に対しないないないがでは、100/22 に対しませないでは、100/22 に対しないませないがでは、100/22 に対しませないないがでは、100/22 に対しませないがでは、100/22 に対しま
3	VSP(ボランティア支援プロジェクト)	オンライン居場所	「コロナ禍で開催するのが難しい」という子ども食堂の実態知り、話したことをきっかけに、NPO法人バイタルプロジェクトさんの協力のもと、子ども居場所ステーションに参加しているご家庭を対象に "オンライン居場所"を開催した。オンラインであっても子どもたちに居場所を提供すること、楽しみながらインターネットに触れてもらうこと、学校に行けていない分、何か学びとなるような機会を提供することを目的とした。4月中旬から準備を始め、居場所ステーションに参加しているご家庭を対象にアンケートを取ったり、バイタルプロジェクトさんのスタッフと話し合いを重ねたりし、楽しみながら居場所作りを進めることができた。"オンライン居場所"当日は各回で内容や方法は違ったが、zoomの機能説明も含めたアイスプレイク、相互理解や目標設定の場となる個別面談、コミュニケーションをとるためのゲームを実施するなどし、楽しくコミュニケーションを取る場を提供することができた。また、最初に各々が何か目標を立て、この期間で目標達成のために練習や学習を進め、最後に成果発表を実施する長期的な取り組みも行った。参加者が少なかったこともあり、今回は「オンラインでどのようにすれば参加者に楽しんでもらえるか」という実験的な面が強い活動となった。今回の取り組みの成果は、子ども達とコミュニケーションを取ることができ、参加した子どもから楽しかったとの感想をもらえたことである。また、今後の居場所作りの参考となる気づきが多くある取り組みとなったことだ。"オンライン居場所"への参加は、端末の有無の問題もあるが親御さんへの負担になる可能性もあることを考える必要があると感じた。今回の"オンライン居場所"では参加者が少なかったとはないえ、第3回目に共同通信社からの取材を受けたことから、社会的にも注目度があり、需要があるのではないかと感じた。オフラインでの居場所に参加している子どもたちはオフラインでの人との繋がりや外での活動を求めていると考えられた。また、オフラインでの活動を望む人たちがいる一方でオンラインでの繋がりを求めている人たちもいるのではないかと感じられた。今回の取り組みをきっかけに"オンライン居場所"に限らず、現在の子ども食堂や居場所事業の実態について学び、考察し、私たち学生にできることは何かを考えていきたい。
4	情報科学部	オンラインの利点を活かした「リアルタイム双方 向コミュニケーション」を重視した各種取り組み	情報科学部では、この未管者の酵局に、参職員および学生が回続して立ち向かいました。特に、学部の方針として「リアルタイムでの双方向コミュニケーション」に一貫して強いこだわりを持ち、「オンラインだからこそできる)数々の取り組みを実施してきました。 (1) 正理招本・証整 著字明・秋学期ともに学範問講科目の8割以上をリアルタイムで実施し、春学期末には「リアルタイム期末試験」も多数行いました。ZoomやOlisco Webexのチャット機能や投票機能を駆使し、数員は受講者の反応や理解技を確認しながら、投事中に制定説明や質問が改を行うなどのによる他しています。システムの操作ました。ZoomやOlisco Webexのチャット機能や投票機能を駆使し、数員は受講者の反応や理解技を確認しながら、投事中に制定説明や質問が改を行うなどのよう。 上げ、日夜支援を行ってきました。その甲斐もあり、春学期末に学部独自で行った「授業改善アンケート」において、オンライン侵業への学生の評価は、従来と比較しても引けを取らない結果となりました。 (2) オンライン窓口。 ・学節窓口 こののによる「オンライン学部窓口」を春学期・秋学期の授業開始〜履修登録期間中に実施しました。質問内容自体は、電話やWebフォーム(メール)と特段の違いはなく、授業の受講方法や履修に関する質問がまてした。しかしながら、リアルタイムでのやリとりと問面ま有機能などの活用により、従来の対のでは実現できないきの細かい実内が可能となりました。 り、字生サポート施設 のおら「オンライン学部窓口」を春学期・秋学期の授業開始〜履修登録期間中に実施しました。質問内容自体は、電話やWebフォーム(メール)と特段の違いはなく、授業の受講方法や履修に関する質問がまてした。しかしながら、リアルタイムでのやリとりと問面ま有機能などの活用により、従来の対のでは実現できないきの細かい実内が可能となりました。 リ・学生サート施設 のおくガンライン学部窓口」を春学期・ベート・オフィスアウー・学生生活サポート施設)やCIS RAT(学生有きによる情報環境支援チーム)についても、同様にZoomによる学生サイト・素を変施しています。6日のでは上後生による学者サポート・オフィスアウー・学生まのサアが重要です。情報科学部では、4年生にはゼミでの会話を通し、1~3年生にはZoomによる学生サイト・美を変施しています。6日のでは、またりまでのようだり、学生のサアが重要です。情報科学部では、4年生にはゼミでの会話を通し、1~3年生にはZoomによる作が力・プライン個人面談を行い、学生の登録といましましましましましましましましましましましましましましましましましましまし
	経営学部 法政大学中学高等学校	講義リレーでつなぐ「実践知」フォーラム 子育て茶話会	【事例の概要】 ・経営学部創設60周年を記念し、2019年6月から11月にかけて「講養リレーでつなく『実践知』フォーラム』と闘する公開セミナー・シリーズを、11回にわたって開催した。 ・法政大学意覧・自由を生き拡く実践和」を理解し、実社会でこの理念を牽引する人材を育むため、経営学部教員有志により条析かつ自由な学びが企画された。テーマには、女性キャリア支援、職場での対話的コミュニケーション、企業の社会的責任など、ビジネス分野における新たな課題が積極的に取り上げられた。講義形式も、ゲスト招聘型、ワークショップ型、学生・社会人の対話形式など様々であり、各教員がデーマにふさわしい。学びの場」を探集した。 ・各講義リレーのうち、最も憲章を体現している講義を総長が選出し、「実践知・総長大賞」として表彰した。 【学生を中心とした運営体制の構築】 ・インターネット上でのPR活動は、経営学部広報委員会(学生有志)が担当した。学部HPおよび公式Facebook上での事前告知に加え、実施報告記事を随時執筆・公開した。 https://www.facebook.com/HoseiKeit/ ・講演リレーを外の運営結構、および報告書作成は、二階堂行宣准教授のゼミナール所属学生が担い、全講義に出席した上で、学生の視点から講義内容と憲章との関係を明確化した。また、「実践知・総長大賞」の選出に際する総長への事前プリーフィングも、同ゼミ学生が担当した。 「移送学部前創設60周年記念パーティー」(2019年12月6日)の場において、経営学部な報委員会編集長・山田理七子(当時3年生)が、講義リレー全体の総括的報告を行った。 「実践知・総長大賞」は、長岡健教授による対話型講義「ワークシフトの「実践物"は可能か・働き方の「未来の常能"を生きる系観者との対話」(10月17日実施)が選出された。 ・この講義は、法政大学ダイル・シティ宣言を基は企画され、女性支援に取り組まれ下の代表、表来型のキャリアをおきな主な名を子々トに存削し、学生社会人の対話を通じて「女性のキャリアと未来の働き方」のビジコンを探った。また、憲章を体現する学びの場を空間的にも追求すべく、学外ワークショップスペースを会場、選び、一般聴衆の積極的参加や、産学間連携も図った。 法政大学中学高等学校では、月1回程度、保護者、教員、養護教諭、スクールカウンセラーが自発的に集まり、自由な雰囲気で語らう場として定着してきた。2020年度は新型コロナウイルス対策の関係で20mを使用したオンラインでの実施となった。 PTA向けにはフェアキャストで保護者を体に広ぐ呼びかけている。テーマは、親子関係、ネットとのつき合い方など。会では、保健室養護教諭が司会を務め、副校長からの検技・競の関係で20mを使用したオンラインでの実施となった。 PTA向けにはフェアキャストで保護者からの技術である。毎年も進の話園は、製造サイギルの、順信を対したりまで流行する。各回とも概れら開発度で終了する。 以下の意見交換は、過去実績からの技術である。毎年も進の診断は、製造社・手能力の傾向である。 コーロ目にはコ・ア・マストで保護者からの表が生がまた。毎月と未被からの接触されて併しまた。 「記者を持ている」になどでは、発表を製造していないところで制にしているといるでは、19世間には、「審検はさらいと関連、イギ社というないに対する、「たらない会話の中から悩んなった。 「規書ではオーザはのいる」は、19世間には、19世間には、19世間には、「審検はさらいと関連、イギ社というないとのできた。 「現まれているのできたいというないというないというないとないままり、19世間には、「審検はさらいと関連、イギ社というないというないといる。 「おりないるのでは、19世間には、1
7	「多文化教育」科目の有志32名(学生の自主活動)	コロナ禍で孤立する留学生のオンライン学習支 援	に根付いている。 背景と概要:本実践は、コロナ禍の2020年の春学期に「多文化教育」科目を履修していた学生たちの中の有志32名が行った留学生支援のボランティア活動である(単位外の活動)。新型コロナウィルス感染拡大により、本学で学ぶ交換留学生、短期の私費留学生の多くは、外出自粛の中で通学ができず孤独と不安を抱えながら、慣れないオンライン授業に参加し懸命に日本語を学ぼうと努力していた。また彼らの多くが、日本語でのニュースや情報を理解することに苦労し、情報弱者として心理的にも物理的にも加立していた。 私たちは多文化教育の授業の中で、そうした留学生の状況を知り、有志の学生32名が自主的に毎週一対一のオンライン(Zoom)による交流や日本語学習支援活動を行った。支援した留学生は、17か国から来た32名である(交換留学生、蒸語学位生、短期私費留学生など)。参加のほぼ全員(留学生・私たちどちらも)がZoom初心者で、また一度も会って話したことがなく、さらに留学生の日本語レベルもわからなかったため、お互いに不安や心配を抱えながらのスタートであった。しかし、支援には様々な成果があった。 成果:全くの初対面だったため、最初は適度な「心のソーシャルディスタンス」をとりながらの活動のスタートだった。しかし、回数を重ねる中で信頼関係が生まれ、留学生には大学・日本とつながっている実感・安心感をもってもらうことができた。また、支援には「やさしい日本語」の使用を意識し、「はっきり・最後まで・短く・分けて・整理して・大胆に」というポイントを心掛け、彼らの留学目的である日本語力の向上を目指し支援したことで、日本語による学習支援の質が高まり、相互理解が深まった。 また、翻訳機に頼らず、自分の言葉で伝えること、伝えようとする気持ちの意義や大切さ、母語として使っている日本語の再発見、コロナ禍の各国のリアルな様子や対応・文化の相違など、私たちにとっても多くの気付きや情報を得ることができた。さらに本活動により、テクノロジーを使った多文化交流・学習支援の可能性を体得し、様々な理由で来日できない海外の学生達との交流や学習支援に今後も生かしていきたいと考えている。 このコロナ禍において、私たちが行った留学生交流・学習支援ボランティア活動の根底にあったものは、国連で採択されたSDGsの「人や国の不平等をなくそう、パートナーシップで目標を達成しよっ、質の高い教育をみんなに」という目標である。本学の「実践知」は、理想の社会の実現にむけて、学生ひとり一人が「今、ここで何ができるのか」を考え、主体的に行動することである。私たちがこの非常事態に行った行動は、ほんの小さな種まきである。しかし、今回まいた種が力強い「実践知」という大きな実となるように今後もつなけていきたいと考える。
8	体育会本部		SNSおよびWEBサイト(法政スポーツインフォメーション)を通じて、自粛期間中の法政大学体育会各部の自宅や寮での取り組みを紹介した。 URL: https://hosei-sports.jp/
9	デザイン工学部建築学科+デザイン工学研究 科建築学専攻	バーティカルレビュー	本実践は、「バーティカルレビュー」と名付けた学年を横断するオンラインによるコンペ(コンテスト)形式のフェスティバルである。建築学科/建築学専攻では、学部1年から大学院まで、設計を通して建築のあり方を学ぶ実習授業「デザインスタジオ1~11」(1~11は各学年の学期に対応。例:学部1年生は1~2)が用意されている。建築学科/建築学専攻では、授業の成果物をアーカイブするサーバーの機能を拡張し、学生が2020年度春学期に行われたデザインスタジオの作品を投稿できるようにした。バーティカルレビューは54作品の応募があり、それらは、ただちに、学生と教員が関質できるWEB上に公開された。学生と教員は作品に「ピン(いいね)」を付したり、コメントをしたりした。教員は個人の判断で個人賞を選出もした。2020年度春学期は校舎内で他学年の作品にリアル触れることができなかったが、このフェスティバルを通して、新型コロナの感染拡大による困難な状況の中で建築のデザインに取り組んだ各学年の学生の熱意と努力を互いに確認することができた。
10	法政大学校友会	法政才レンジコミュニティ(HOC)	下記添付資料参照 http://phronesis.hosei.ac.jp/application/files/3216/0644/9638/02.pdf
_		ı	